様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月３１日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21401028
研究課題名（和文）　旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク
研究課題名（英文）　Internal Structure and Relationship with the Authorities of Russian Diaspora in Manchukuo: Fluidity of Borders and Networks

研究代表者
生田　美智子（IKUTA MICHIKO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：40304068

研究成果の概要（和文）：
本課題はロシア系ディアスポラ社会が、日本の傀儡国家「満洲国」体制下で示したダイナミズムを日常世界のなかの様々なネットワークを分析することで解明することにある。そのため、生田は社会･文化、藤原は経済、伊賀上は宗教、上田は中国社会との関係に注目し、考察した。その成果は、国外ではストックホルムの国際中東欧学会、ウラジオストクの日露学術シンポジウム、国内では近現代東北アジア地域史研究会、本科研メンバー主催のシンポジウム（於：大阪大学）で口頭報告され、さらに研究成果報告書の形で出版された。

研究成果の概要（英文）：
The goal of this project is to clarify the dynamic state of Russian Diaspora in the Japanese puppet-state of Manchukuo through the analysis of various networks existing in daily life. For this purpose Ikuta concentrated on the investigation of social and cultural aspects, Fujiwara on the economic ones, while Igaue examined religion and Ueda relations with Chinese communities. The results of this project were presented orally at the panel held at the International Council for Central and East European Studies in Stockholm, the Japanese-Russian Joint Symposium in Vladivostok, at the meeting of the Association for Modern and Contemporary History of Northeast Asia and at the International symposium organized by project members in Osaka. Finally, the reports are published in the book under the same title as the project.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2010 年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2011 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
年度			
年度			
総　計	10,900,000	3,270,000	14,170,000

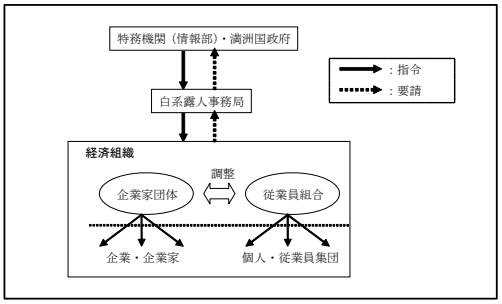
研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：ディアスポラ、ネットワーク、アイデンティティ、出身国、ホスト国、境界の流動性、ナショナリティ、傀儡国家

１．研究開始当初の背景
ロシア人ディアスポラの研究は、ソ連崩壊後の政治的規制の緩和によって急速に隆盛した。それはソ連時代に敷かれていた「反革命勢力」情報へのアクセス制限が解かれただけでなく、諸共和国の独立による新たな「ディアスポラ」の出現や、グローバル化の進展による人口移動の加速化によって、国家と移住者・亡命者の関係が切実な問題として認識されるようになったためである。このような流れのなかで、20 世紀の複雑な国際関係の影響下にあった中国東北部（「旧満洲」）ロシア人についても、政治史のみならず、社会史、文化史領域の研究が多く登場するようになり、ハルビンを中心にしてディアスポラ社会の適応・同化問題や異文化混淆の問題が議論されるようになった。
申請者もそのような流れの中で 2008 年度平和中島財団の国際学術研究助成金を受けて、研究課題「旧満洲白系露人事務局関連文書の調査―ディアスポラ社会の対権力関係と内部構造」を遂行した。その調査過程で亡命ロシアとソヴィエトロシアが単なる二項対立の関係ではないことに気づき、境界の流動性とネットワークの観点からロシア系住民全体を考察することを着想した。

２．研究の目的
（1）20 世紀前半に旧満洲に存在したロシア系ディアスポラ社会が、日本の傀儡国家「満洲国」体制下で示したダイナミズムを、人々が日常世界のなかに構築した様々なネットワークを分析することで解明する。
（2）境界の流動性の角度からディアスポラ社会の内部構造と対権力関係を把握し、権力に対峙するディアスポラの力とは何であったかを解明する。

３．研究の方法
（1）従来ロシア系ディアスポラ社会を分断すると考えられてきた諸要素に注目することで、逆に各集団間の相互作用や流動性を解明する。
（2）ロシア系住民の歴史的動態を事件への関与だけでなく、着衣や生活様式などの日常生活に着目することで解明する。
（3）実地調査と史料・文献研究の両方のアプローチを用いる。現地調査ではオーラルヒストリーを採集する。
（4）分析資料として、文献資料だけでなく、映像や絵画、絵葉書などの視覚メディアを用いる。

４．研究成果
（1）研究組織として、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会をたちあげ、分担を決めた。すなわち、生田は社会・文化活動、藤原は経済活動、伊賀上は宗教活動、バキチは出版活動、アウリレネは政治活動、上田は中国との関係を担当することを決め、学術論文を雑誌『セーヴェル』へ掲載し、その都度論文の内容をメールで合議討論した。
海外での学会報告としては、2010年ストックホルムで行われた第8回国際中東欧研究学会で「アジアにおけるロシア系移住者の文化遺産」と題したセッション（座長：生田）を組織し、世界に発信した。2011年には、ウラジオストクとハバロフスクのロシア科学アカデミー極東支部で開催された第27回日露極東シンポジウムで研究参加者が報告した。研究参加者の論文一本が中国語に翻訳され、二本がロシア人と共著の形で刊行された。
国内での学会報告としては、第21回近現代東北アジア地域史研究会の「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係―境界の流動性とネットワーク」と題したシンポジウムで研究参加者が報告と司会を担当した。
研究実施期間中、毎年シンポジウムを開催し、研究参加者が成果報告をしたほか、最終年度には、日本国内および海外からハルビンツィ（ハルビン人）を招待して、大阪大学で国際対話集会を開催した。
最終年 2012 年 3 月には報告集『旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク』（299 頁）を刊行した。
（2）モスクワ、ペテルブルグ、ノヴォシビルスク、サンフランシスコ、バークレー、シドニー、メルボルン、ダンディノンで採集した元在満亡命ロシア人のオーラルヒストリーのテープをおこし、文字資料にまとめた（未刊行）。そのことにより文献資料で想像する以上に亡命ロシアとソヴィエトロシアの境界は流動的で、さまざまなネットワークが存在していたことを確認できた。
（3）ハバロフスク地方文書館にある白系露人事務局の史料を経済活動から分析した結果、亡命ロシアと対権力との関係および内部構造は以下のように図式化出来ることを提示した。



さらに、経済活動の分野では、満洲におけるロシア人ビジネス撤退の例としてチューリン商会の売却過程をとりあげ、公的なビジネスネットワークや私的な人的ネットワークに着目し、ロシア人企業から日本人企業への勢力交代がどのように行われたかを解明した。

(4) 経済活動に関するロシア語史料の分析により得られた白系露人事務局に関する知見を日本語史料と照らし合わせた。ハバロフスクの文書館で再調査を行い、白系露人事務局の財政基盤と日本人の関与の有無を確認した。以上のロシア語史料と日本語史料の照合調査から、設立の当初から事務局は、日満当局による白系露人に対する指導・統制を仲介する側面と白系露人の自治・代表組織としての側面を持つという二面性をはらむ組織であり、時代によりその優先順位が変化したことを明らかにした。

(5)宗教活動の分野では、1930 年代前半に古儀式派のベロクリニーツァ派がソ連在住の同派主教と交わした往復書簡を事例として、亡命社会が本国や他地域に分散した人々との間に形成したネットワークの特徴を明らかにした。また、古儀式派のロマノフカ村を扱った当時の映像、画像、文学作品、随筆、論文、観光案内などの日本側史料に現れる古儀式派の表象から満洲国時代の日本人が描いていた亡命ロシア人像を提示した。

(6)政治活動の分野では、亡命ロシア人が満洲、天津、上海、新疆において形成したロシア人コロニーをとりあげ、政治・社会・文化的ネットワークが亡命者の日常生活と文化的アイデンティティに与える影響を解明した。

(7)中国との関係では、当局によるハルビン市の市政回収をとりあげ、ロシアとのネットワークをもつ有力者のリーダーシップのもとで市政回収を行うことで、ハルビンは自治権回収後も国際都市としての特徴を維持し、社会的・経済的安定を図ろうとしたことを明らかにした。

(8)社会・文化活動の領域では、ポスターや伝単、絵葉書の分析により満洲国内の諸民族における亡命ロシア人の位置、とりわけ主要五族の境界を行き来していた不安定で周縁的な位置を明らかにすることができた。また、満洲における亡命ロシアとソヴィエトロシアの着衣や日常の生活様式を分析することで、どのような相互関係のもと、ロシア人としての一体性を保ち、ハルビンツィ（ハルビン人）としての新しい在外ロシアアイデンティティを持つに至ったのかを明らかにした。

さらに、ハルビンで発行されていたロシア語の定期刊行物を分析し、亡命ロシア系出版物とソヴィエトロシア系出版物との対立と共存、交流の実態に着目することで、満州のロシア系ディアスポラの特徴を明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

① 生田美智子、シンポジウム「満洲の中のロシア」について、セーヴェル、査読有、28 号、(2012)、5－24

② M.B.クロートヴァ著・藤原克美訳、北満洲における「モスクワから出張してきた」ソヴィエト代表者（1920～30 年代)、セーヴェル、査読有、28 号、(2012)、66－78

③ 生田美智子、ハルビンにおける二つのロシア、旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク（平成 21～23 年度科学研究費補助金（基盤研究（B） 研究成果報告書)、査読無、(2012)、19－65

④ 藤原克美、満洲国におけるロシア人ビジネスの衰退と人的ネットワーク：チューリン商会の売却を中心に、旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク（平成 21～23 年度科学研究費補助金（基盤研究(B) 研究成果報告書)、査読無、(2012)、151－176

⑤ 伊賀上菜穂、ロシア正教古儀式派教会における本国と亡命者社会の連関：ソ連・旧「満洲」往復書簡より、旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク（平成 21～23 年度科学研究費補助金（基盤研究(B) 研究成果報告書)、査読無、(2012)、237－266

⑥ 上田貴子、哈爾濱における市政回収運動、旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク（平成 21～23 年度科学研究費補助金（基盤研究（B） 研究成果報告書)、査読無、(2012)、121－150

⑦ オリガ・バキチ著・有宗昌子訳、ハルビンのロシア語定期刊行物、旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク（平成 21～23 年度科学研究費補助金（基盤研

究(B) 研究成果報告書)、査読無、(2012)、93－104

⑧ エレーナ・アウリレネ著・阪本秀昭訳、中国におけるロシア亡命者文化の運命の地域的要因（1920～40 年代)、旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク（平成 21～23 年度科学研究費補助金(基盤研究（B） 研究成果報告書)、査読無、(2012)、267－278

⑨ 生田美智子著・何雪梅訳、哈爾濱俄羅斯人：東方俄羅斯僑民的同一性問題、俄羅斯文芸、査読無、(2012)、59－62

⑩ 生田美智子、白系露人事務局―ハルビンにおける活動を中心に―、セーヴェル、査読有、27 号、(2011)、5－20

⑪ 藤原克美、1930 年代前半のチューリン商会－ニコライ・カシヤノフの手記より、セーヴェル、査読有、27 号、(2011)、106－118

⑫ 伊賀上菜穂、日本人の三河コサックイメージ：1930年代～1945年の日本語資料の分析より、セーヴェル、査読有、27号、(2011)、31－51

⑬ 上田貴子、20 世紀の東北アジアにおける人口移動と「華」、中国研究月報、756 号、(2011)、29－41

⑭ 生田美智子、満洲の亡命ロシア女性の表象―着衣と裸体―、セーヴェル、査読有、26 号、(2010)、19－33

⑮ 藤原克美、ロシア企業としてのチューリン商会、セーヴェル、査読有、26 号、(2010)、34－47

⑯ アルグジャエヴァ・ユリヤ著・伊賀上菜穂訳・解説、アムール川、ウスリー川沿岸地域のザバイカル・コサックたち（19 世紀後半～20 世紀初頭)、セーヴェル、査読有、26 号、(2010)、57－74

〔学会発表〕(計 20 件)

① 生田美智子、ハルビンの白系露人事務局、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2012 年 1 月 21 日、大阪大学 21 世紀懐徳堂

② 藤原克美、所有と経営からみるチューリン商会、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2012 年 1 月 21 日、大阪大学 21 世紀懐徳堂

③ オリガ・バキチ、ハルビンのロシア語定期刊行物、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2012 年 1 月 21 日、大阪大学 21 世紀懐徳堂

④ 生田美智子、ハルビンにおける二つのロシア、第 21 回近現代東北アジア地域史研究会、2011 年 12 月 17 日、近畿大学 BLOSSOM CAFE 多目的ホール

⑤ 藤原克美、1930 年代のチューリン商会、第 21 回近現代東北アジア地域史研究会、2011 年 12 月 17 日、近畿大学 BLOSSOM CAFE 多目的ホール

⑥ 藤原克美、1930 年代のチューリン商会、第 27 回日露極東シンポジウム、2011 年 9 月 8 日、ロシア科学アカデミー極東支部・ハバロフスク経済学研究所

⑦ 生田美智子、白系露人事務局―ハルビン総局の活動を中心に、第 27 回日露極東シンポジウム、2011 年 9 月 5 日、ロシア科学アカデミー極東支部・歴史学・考古学・民族学研究所

⑧ 生田美智子、白系露人事務局の活動：中央の場合、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2010 年 12 月 25 日、ユーアイホール（茨木市）

⑨ 上田貴子、1920 年代東北アジアにおける人口移動―女性の場合、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2010 年 12 月 25 日、ユーアイホール（茨木市）

⑩ 伊賀上菜穂、日本人の三河コサックイメージ（1930～1945 年)、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2010 年 12 月 25 日、ユ

ーアイホール（茨木市）

⑪ 生田美智子、満洲におけるロシア系移住者の文化遺産:ハルビンの音楽生活より、VIII World Congress of ICCEES、2010年7月30日、ストックホルム市コンフェレンスセンター

⑫ 藤原克美、ロシア企業としてのチューリン商会、VIII World Congress of ICCEES、2010年7月30日、ストックホルム市コンフェレンスセンター

⑬ 伊賀上菜穂、満洲国時代における日本人の三河コサック農村イメージ、VIII World Congress of ICCEES、2010年7月30日、ストックホルム市コンフェレンスセンター

⑭ オリガ・バキチ、中国で作られたロシア詩のなかの中国イメージ、VIII World Congress of ICCEES、2010年7月30日、ストックホルム市コンフェレンスセンター

⑮ エレーナ・アウリレネ、中国のロシア系移住民文化の運命における地域的要因（1920～1940年代)、VIII World Congress of ICCEES、2010年7月30日、ストックホルム市コンフェレンスセンター

⑯ 生田美智子、旧満洲における亡命ロシア文化、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2009年12月28日、高槻ワークホテル

⑰ 藤原克美、ハルビンにおけるロシア人の経済生活―チューリン百貨店の果たした役割、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2009年12月28日、高槻ワークホテル

⑱ 上田貴子、移民の成功戦略―ロシア支配下における中国人移民と日本人移民の比較から、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2009年12月28日、高槻ワークホテル

⑲ 思泌夫、ブリヤート人のアイデンティティの形成：境界性に生きる、「旧満洲ロシア系ディアスポラ社会の内部構造と対権力関係：境界の流動性とネットワーク」プロジェクト研究会、2009年12月28日、高槻ワークホテル

⑳ 上田貴子、「満洲」の中国化―19世紀後半から20世紀前半期の奉天地域アイデンティティの形成、東アジア歴史研究者フォーラム、2009年11月7日、グランドヒルトン（ソウル）

〔図書〕（計2件）

① 生田美智子、ハルビン人の回想に見るロシアイメージ、在外ロシア文化における回想、フリンタ社：タリン・ナウカ社：ペテルブルグ、査読無、(2010)、218－226

② 生田美智子、満洲帝国における亡命ロシア人とソヴィエト市民、スダルニャ社：ペテルブルグ、査読無、(2009)、96－103

６．研究組織

(1)研究代表者
生田　美智子（IKUTA　MICHIKO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：40304068

(2)研究分担者
藤原　克美（FUJIWARA　KATSUMI）
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号：50304069

上田　貴子(UEDA　TAKAKO)
近畿大学・文芸学部・准教授
研究者番号：00411653

(3)連携研究者
思 泌夫（Si Qinfu）
大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・特任准教授
研究者番号：40452445

(4)研究協力者
伊賀上菜穂（IGAUE NAHO）
中央大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：10346140

オリガ・バキチ
トロント大学・CERES・リサーチアソシエイト

エレーナ・アウリレネ
ハバロフスク国境大学・一般法部門・教授

ビクトリア・ロマーノヴァ
極東人文大学・政治史部門・教授